

人生はいいことも そうでないことも 半分半分。 だからこそ 成長するのです。

僧侶 塩沼亮潤

仙台の高校を卒業後、大峯千日回峰行をさせていた
きたいと思い、吉野・金峯山寺に入りました。この修行は往
復48キロ・高低差1300mの山道を、毎日16時間かけて
合計約1000日歩き続ける修行です。暑い日も寒い日も
台風の日も、どんなに体調が悪くても途中でやめること
は許されません。もしやめればその場で切腹しなければな
らず、そのための短刀も持ち歩いています。途中で体調を
崩し、山道で倒れ、そのまま死んでしまいそうになったこと
もありましたが「出家する朝に母親から言われた「砂を噛
むような思いをして一人前になつてきなさい」という言葉を
思い出し、最後までやり遂げることができました。
命がけて厳しい修行をする理由は、お坊さんは人生に迷
つている人のお手本であらねばならないからです。そのため
にはお坊さん自身が絶対的な安穩を得ていなければなり
ません。厳しい修行はその境地に近づくためのひとつの手
段にすぎないのです。

今は人びとが希望を持ちにくい時代だと言われています
ですが、私は希望に満ちあふれています。この先の世の中や
自分がどうなるのかなあと考えるときも楽しんで、それ
は希望そのものです。もちろんいろんなことが起るでし
ようが、人生はいいことも悪いことも半分半分。その中で誰
しもが人生の終着駅に向かって歩いていく。そして最期に
自分の人生、やりきったなあと思いつつ土に還っていく。
ただそれだけのことで、日々精一杯生きるなかに成
長を実感でき、とても幸せです。

Ryojun Shionuma 塩沼亮潤

しおぬま・りょうじゆん ●1968年宮城県生まれ。東北高校卒。小学5年生のときにテレビで酒井雄哉大阿闍梨の千日回峰行のドキュメンタリー番組を見て仏門を志す。19歳のとき、金峯山寺で出家得度。22歳から大峯千日回峰行を開始。31歳で金峯山寺の1300年の歴史の中で2人目となる満行を果たし、大阿闍梨の称号を得る。その後も断食、断水、不眠、不臥を9日間続ける四無行や百日間五穀と塩を絶ち、一昼夜護摩を焚き続ける八千枚大護摩供も満行。その後、仙台市秋保に慈眼寺を建立、住職を務めている。「人生生涯小僧のこころ」「執らわれない心 日本人の生き方の原点に立ち返れ!」「日本人の宝」『大峯千日回峰行 修験道の荒行』など著書・共著多数。